

朝のこない夜はない

褒め合って

明るい人生を送りましょう

鈴木正修

山首上人さまの御遷化に際しまして大勢の方に
御弔問頂きました事、まずお礼を申し上げます。
ありがとうございます。これから全山上げて山

首上人さまのご遺志を継ぎ、三徳の実行、広宣流
布に励んでいきたいと思えます。変わらぬご支援
をお願い致します。



山首上人さま最後の二教化

山首上人さまは、一昨年十一月から八事日赤病

院に入院してみえました。どこが悪いという事はなかつたのですが、子どもの頃に肺の病氣を患われて、その影響でだんだん衰弱されてきたようです。ですから入院中も痛いとか苦しいという事は特にありませんでした。最期は母の手を握られて、安らかに眠るように息を引き取られました。

山首上人さまは本当に本がお好きで、入院中もずっと読んでおられました。中でも特に冒険小説がお好きで、一晩に二冊くらい読まれる事があつたくらいです。とにかく読むのが早く、また、本のソムリエと言つてもいいくらい、山首上人さまが面白いと言われた本は本当に面白くて、私もよ

く読ませてもらいました。年末になりますと、そ

の年の冒険小説の面白かつたランキングがいろいろな雑誌に出るのですが、そのランキングよりも山首上人さまが選ばれるランキングの方が面白いのです。映画もお好きで、面白いと言われた映画は本当に面白い映画でした。

小学生の頃から映画に連れて行つてもらいましたが、デイズニーとかではなく、大人の映画でした。その影響で私は、冒険小説と映画が今でも大好きです。

痛いとか苦しいという事のない入院生活でしたが、唯一悔いが残られたとすれば、皆さんの前でご法話ができなかつた事でしよう。

「明日、講日ですよ」とお伝えすると、「法話に

行きたいけど行けそうにないな」と落胆してみえ
ました。

昨年十一月三日の御法推進全国大会の直前には、
家内がお昼に伺って「御法推進全国大会で何か皆
さんにお言葉をいただけませんか？」とお聞きし
たところ、

「生きているうちしか罪障消滅ができないから、
一生懸命に生きているうちに徳を積むように、と
伝えて下さい」

と言われたという事です。これが最後のご教化と
なりました。

通夜・葬儀の時にそのお心を戴いて「命ある限
り、徳を重ねていきましょう」と皆さんにお話し
させて頂きました。

山首上人さまの孝行

山首上人さまは、昭和三十七年十月に法音寺の
山首になられ、五十年以上も山首として過ごされ
ました。御開山上人が六月七日に亡くなられて三
十二歳の時、突然、全部の長になられました。法
音寺も大学も昭徳会も、また昭徳会各施設の長も
全部されたのです。私だったらまいってしまふの
ではないかと思えます。

その時、法音寺には銀行に莫大な借金がありま
した。一説によると当時のお金で一億円くらいあ
ったという事です。その大半は、日本福祉大学を
つくる為に御開山上人が借りられたものです。そ
れでも足りず、お寺のお金をどんどん使われたそ
うです。どうしてそのような事になったかという

と、大学をつくる時に国から出るはずだった援助が、警察予備隊（自衛隊の前身）をつくるという事で関係予算が削られたのです。そのため、全額自己資金でやらなければいけない事になりました。先生方は一流の人を呼びたいという事で、国立大学の教授並みの高額な給料を払い、研究費も充分出し、住む所も提供する事にしました。一方学生の方は、とにかく志のある人にはみんな来てもらいたいという事で、国立大学の学生並みの安い月謝にして、住む所も提供されました。出るのが多く、入るのは少なく、国からの補助金もないのですから毎年、ものすごい借金がかさんでいったのです。それを山首上人さまは全部引き受けられ、お寺も大学も昭徳会も、御開山上人の当時より何

十倍も大きなものにされました。大学は福祉の総合大学になり、昭徳会は日本でも有数の社会福祉法人となりました。法音寺も、大本堂を建立され、支院の数も増え、各支院のほとんどすべてを建て替えられました。ですから、本当に大親孝行をされたのではないかと私は思っています。

偉業の理由

このようになった理由を考えてみました。一つ目は、御開山上人から受け継がれた事業に強い使命感をもって真剣に取り組まれた事です。

二つ目は、いつも人を喜ばせようと思ひ、そのように行動されていた事です。信者の皆さんはもちろんの事、施設の職員も、子どもたちも、ご老

人^{じん}たちも、皆^{みな}さんに喜^{よろこ}んで頂^{うたい}こうと、それだけを考^{かんが}えて日^ひ々^びやってみえました。そのお徳^{とく}も大^{おお}きいのではないかと私^{わたし}は思^{おも}うのです。ご教^{きょう}化^けを受^うけられた方^{かた}はご存^{ぞん}知^じだと思^{おも}うのですが、お話^{はな}を聞^きいてもらうだけで、山^{さん}首^{しゅ}上^{じやう}人^{にん}さまのお顔^{かお}を見^みるだけで何^{なん}だか元^{げん}氣^きになりました。それだけで罪^{つみ}が取^とれたような感^{かん}じになられた方^{かた}も多^{おほ}いと思^{おも}います。

三^{さん}つ目^めは、山^{さん}首^{しゅ}上^{じやう}人^{にん}さまが明^{あか}るい方^{かた}だった、と
い^いう事^{こと}です。い^いつもユ一^いモア^あたつぷりでした。

——山^{さん}首^{しゅ}上^{じやう}人^{にん}さまのユ一^いモア^あ——

山^{さん}首^{しゅ}上^{じやう}人^{にん}さまはよく面^{おも}白^{しろ}い事^{こと}を言^いわれました。
普^ふ通^{つう}の人^{ひと}には氣^きもつかないよ^いうな事^{こと}を、面^{おも}白^{しろ}く言^いわ^いれました。私^{わたし}が小^{せう}学^{がく}生^{せい}の頃^{ころ}、家^か族^{ぞく}で田^{いな}舎^{なか}の蕎^{そば}麦^{ばい}

屋^やさんに入^{はい}った事^{こと}がありました。山^{さん}首^{しゅ}上^{じやう}人^{にん}さまは天^{てん}ぶら蕎^{そば}麦^{ばい}を注^{ちゆう}文^{もん}されました。大^{おお}きな天^{てん}ぶらがの^のつていましたが、それを見^みて山^{さん}首^{しゅ}上^{じやう}人^{にん}さまは「こ^これは坊^{ぼう}主^ず天^{てん}ぶらだな」と言^いわれました。「なぜで^ですか」とお聞^ききすると「衣^いばかりで中^{なか}身^みがない」と言^いって笑^{わら}われました。大^{だい}学^{がく}の食^{しょく}堂^{どう}のどんかつも衣^いばかりなので「あれは坊^{ぼう}主^ずとんかつだな」とか、そ^そうい^いう自^じ虐^{ぎやく}ネタも含^{ふく}め、面^{おも}白^{しろ}い事^{こと}をよく言^いって^すみえました。とにか^かく人^{ひと}を笑^{わら}わせるのがお好^すきで^すした。

山^{さん}首^{しゅ}上^{じやう}人^{にん}さまはそ^そうい^いうジヨ一^いクも含^{ふく}めて、と^とにか^かく明^{あか}るい方^{かた}でした。普^ふ通^{つう}の人^{ひと}ではつぶされて^てしま^いい^いそ^そうな厄^{やく}介^{かい}な事^{こと}も、深^{しん}刻^{かく}には受^うけ止^とめな^い方^{かた}でした。「ま^まあ何^{なん}とかなるぞ」とい^いうところ^{ところ}が

あったのです。これは御開山上人から引き継がれた性格だと思えます。御開山上人が生の松原のハensen 病の施設で何もなくなつた時に「何も無い。着る物も食べる物もお金も無いですよ。しようがないから歌でも歌いましょうか」と言われたそうです。そういう発想はなかなか浮かばないものです。

先ほど申し上げた大学の話もそうです。大学の経営はどんどん借金がかさみ、火の車となりました。そんな中でも毎年、年末にはお寺で忘年会が行なわれたそうです。普通、忘年会というと楽しいものですが、大学の先生も職員も皆さん、暗い顔をしてみえたそうです。「来年は大学ないかな…給料ももらえないかな…」と。そこで御開山上人は

皆さんの顔を見ながら言われたそうです。

「皆さんの想像されるとおり大学の経営は火の車です。しかし、火の車は回るのが妙ですな」

皆さん煙に巻かれ、しばらくは、大笑いされたそうです。

そういうところが山首上人さまにもおありになりました。普通の人だったらつぶされそうな深刻な事でも、山首上人さまには深刻ではなかったのです。私はこういう事がリーダーには本当に大事だと思えます。

ビクトール・フランクルの心理療法

私の尊敬する人にビクトール・フランクルという、ユダヤ人の精神科医であり、心理学者でもあ

った方がいます。この方はナチスドイツ、ヒットラーの造ったアウシュビッツという強制収容所に入れられて生き残った方です。そのフランクルが「あの過酷な状況から生き残るために必要だったものは『ここを出たらこういう事をする』という強い願望と、ユーモアのセンスだった」と言っています。「ユーモアは魂の武器だ」とも言っています。

この強い願望とか目的意識というのは、フランクルの提唱したロゴセラピーという心理療法に集約されています。

絶望的な状況になると誰しも人生に期待できません。そこでフランクルは「人生に期待するのではなく、人生から自分は何を期待されているかを

思え」と言うのです。要するに、自分の使命を思え、という事です。アウシュビッツに於て、娘さんがどこかで待っているという人には「その娘さんの為に生きなければいけないじゃないか」と言い、やりかけの仕事があるという人には「その仕事をやり遂げるのがあなたの使命だ。その仕事あなたがあなたを待っている」と言って励ましたそうです。そのように励まされた人たちは皆、生き延びたというのです。

またフランクルは、アウシュビッツに収容されているという絶望的な状況の中で毎日、面白い話を考えてみんなにしたと言います。そして仲間もまた、面白い話を考えて話しました。それも生きる糧になったのです。

高柳和江さんの笑い療法

山首上人さまのようにユーモアたっぷりにお話を
するのはなかなか難しい事ですが、人に笑顔に
なってもらう良い方法が実はあります。〃褒め
る〃事です。褒められると誰でも笑顔になります。
よくお話ししますが、笑顔になるだけで人間の体
調というのは良くなるのです。笑顔でいるだけで
過酷な状況を耐え抜く事が出来ます。

最近、笑いを治療に取り入れているお医者さん
がたくさんいらっしゃいます。その代表が高柳
和江さんという女医さんです。ある時、高柳さん
が青森県の知事さんに「自殺率を下げたい」
と頼まれました。青森県は自殺率が全国二位で、
知事さんは「どうか自殺率を下げたい」と考え

ていました。そこで、高柳さんは元々やっている
笑い療法を取り入れる事にしました。高柳さんの
笑い療法とは、〃褒め合う〃事です。まず、県の職
員を集めて一日数時間、それを三日間、笑いのワ
ークシヨップとしてされたそうです。内容は非常
に単純です。最初に隣同士向き合います。人間は
向き合うと自然に笑顔になるようです。それから、
ジーっと見つめ合い、相手の方の全体を見ます。
そして、褒めるところを探します。次に片方が褒
めたら、もう片方が褒めます。そういう事を交互
に繰り返します。しかし、突然言われてもなかな
か人を褒める事はできないものです。でも不思議
なもので、一つ二つ褒めだすと次から次に見つか
るそうです。その時に注意事項があります。例え

ば服装を褒める時「その服なかなかいいですね」というふうに褒めるのではなく、「その服を選ばれたセンスが素晴らしいですね」というふうに褒めるのです。要するに、とってつけたように褒めてはいけないという事です。他にもいろいろな事をやりますが、それが中心です。

三日間やった人について、高柳さんはこんな事を言ってみえます。「初日にリュウマチで杖をつきながらやつとの思いで来たご婦人が、三日経たら『もう杖なんかいらぬ』と言って帰って行かれました」と。リュウマチが劇的に改善されたのです。また、PTSD（心的外傷後ストレス障害）で三十年近く人前でマスクを外せなかった男

性が、三日後の記念撮影ではマスクを外して、にっこりピースをしたと言います。他にもアンケートを取ると「活力が湧いてきた」「頭の回転が良くなった感じがする」「職場にいやだと思う人がいなくなった」「自分の事を好きになった」「自殺しようと思っていたがやめました」などという回答がありました。

褒め合うという事、笑うという事、明るいという事が大事なのです。皆さんこれから山首上人さまをいろいろところで思い出されると思いますが、あの笑顔を思い出されると思い出した瞬間に、きっと元氣になれるに違いありません。